

潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育 －2020年度活動報告－

**Report on the Activities of the Recurrent Education and the Job Training Project
for Potential Nursery Teachers : A Report of the Activity 2020**

小 谷 彰 吾 ・ 澤 津 まり子
池 田 明 子 ・ 松 本 希
荊 木 まき子 ・ 山 下 世史佳
土 田 耕 司 ・ 柴 川 敏 之
ズビャーギナ章子 ・ 鎌 田 雅 史
上 山 智 子

潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育

－2020年度活動報告－

Report on the Activities of the Recurrent Education and the Job Training
Project for Potential Nursery Teachers : A Report of the Activity 2020

小谷 彰 吾 (幼児教育学科)・澤 津 まり子 (幼児教育学科)

KOTANI Shogo

SAWAZU Mariko

池田 明 子 (幼児教育学科)・松本 希 (幼児教育学科)

IKEDA Akiko

MATSUMOTO Nozomi

荊木 まき子 (幼児教育学科)・山下 世史佳 (幼児教育学科)

IBARAKI Makiko

YAMASHITA Yoshika

土田 耕 司 (幼児教育学科)・柴川 敏之 (幼児教育学科)

TODA Koji

SHIBAKAWA Toshiyuki

ズビャーギナ章子 (幼児教育学科)・鎌田 雅史 (幼児教育学科)

ZVYAGINA Akiko

KAMADA Masafumi

上山 智 子 (潜在保育士プロジェクト)

UEYAMA Tomoko

キーワード：潜在保育士、復職支援、卒後リカレント教育

I. はじめに

厚生労働省(2020)の調査¹⁾によると、待機児童数は2020年度に前年比4,333人減の12,439人となり、全国的には待機児童が減少している状況にある。岡山市(2020)の調査²⁾では、待機児童数は過去3年間において849人(2017)、551人(2018)、353人(2019)と減少傾向にある。しかし、全国の自治体ごとの集計では、岡山市は全国でも4位という高い水準で待機児童を抱えている。

岡山市では、保育士の人材確保対策の推進を図るため、2014年度より「岡山市保育士・保育所支援センター」を開設し、潜在保育士の再就職支援や保育所の人材確保の支援等を行ってきた³⁾。このような流れの中で、就実短期大学幼児教育学科では、保育士として勤務経験の有無にかかわらず、保育士資格をもちながらも就業していない「潜在保育士」の保育士復帰を目的として、2014年度に潜在保育士復職支援プロジェクトを立ち上げた。2014年度・2015年度は岡山県の委託事業として、2016年度は公益財団法人福武教育文化振興財団の助成

を受けて活動した。また、2015年度からは卒後リカレント教育研修会も加えて学び直しの機会も提供することとして現在に至っている。^{4) 5) 6) 7) 8)}。

2019年度活動報告⁸⁾の中で、「研修会情報の周知及び案内方法」「実践現場に即した研修内容の充実」「リカレント教育と、潜在保育士復職支援の融合」の3点が課題としてあげられた。1点目の「研修会情報の周知及び案内方法」については、研修会ポスターや案内チラシの送付など従来の方法に加え、本学ホームページでの情報の周知を工夫することとした。2点目の「実践現場に即した研修内容の充実」については、現在の保育現場の動向や実践にすぐに役立つような情報、昨年度の参加者の要望に応える内容等を盛り込むこととした。3点目の「リカレント教育と、潜在保育士復職支援の融合」については、実際には新型コロナウイルス感染症対策のため本学の卒業式中止が余儀なくされたが、予定としては卒業式の際に、卒業生にリカレント教育としての当該研修会参加について推奨することとした。

Ⅱ. 研修実施までの経過と研修の実施内容

1. 研修実施までの経過

予定としては、例年通り8月下旬から9月にかけて研修を実施する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、感染症対策の第1段階として実施日を9月に変更すること、参加人数を10名に限定することを考慮した。また、感染症対策の第2段階としてオンライン研修を検討したが、受講生のオンライン環境に関わる個人差等を考慮し、各講座の講師が作成した資料を郵送し、「紙面研修」とすることとした。

なお、研修会の1講座である「情報交換会」では、2名の講師をお招きしてご講話いただく予定であった。1名は保育園の現状に関する話題提供や復職に関するアドバイス等について岡山市岡山っ子育成局保育・幼児教育課職員の方に、もう1名は再就職までの経緯や思い、就職後の現在について昨年度研修会に参加し、現在保育士としてご活躍いただいている方にご講話いただく予定であった。また、研修会の1講座である「就実こども園での体験学習」をこども園の先生方にご快諾いただき実施する予定であった。この2講座については新型コロナウイルス感染症対策のため、今年度は中止とした。

2. 研修の実施内容

今年度実施した紙面研修講座は「教育相談」「幼児体育」「乳児保育」「器楽」「保育内容総論」の5講座であった。それぞれの概要は次のとおりである。

(1) 教育相談

今年度は、対面での講義ができなくなったため、自宅でも安心して学べるように、「カウンセリングを応用した親子対応のポイント」として、カウンセリングの概要から実際の保育場面に使える実践編まで、子どもや保護者への対応の基礎として活かしてもらえる内容とし

た。

実際の講義内容では、カウンセリング場面での相手に合わせコミュニケーションを調整し、迅速に信頼関係を構築していくラポールの形成や、受容、共感、純粋性といった来談者中心療法でのセラピストの3条件、カウンセリング上で使用する聞き方として、感情の受容やくり返し、感情の反射、感情の明確化、自己開示といった技法の説明をした。また、これらの技法を保育場面で具体的に実践するために、カウンセリングマインド（カウンセリングの精神）を持つ保育者がどのような態度を持つのが望ましいのかについても説明した。そこでは、カウンセリングマインドとは、子どもや保護者に対してだけでなく、保育者も一緒に変容していくことの大切さを伝えた。

実践編では、普段の自分自身の態度がカウンセリングマインドとなっているかといった普段の子育てや対人関係を振り返るチェックリスト、子どもの訴えに対する言葉がけのシナリオ作りで、普段の行動や言葉を見つめなおしてもらった。

さらに、カウンセリングマインドをより実践的に理解してもらうために、いくつかの保育場面を取り上げて、カウンセリングマインドを実践するには、どのような態度が望ましかったのかを考えてもらい、最後にこれらの保育場面から、カウンセリングマインドとして考えるポイントを伝えた。

(2) 幼児体育

現在、新型コロナウイルス感染症の流行により、保育現場や教育現場において、運動機会が中止されたり、縮小したりしている。これは、当初、運動施設でのクラスター発生が多数発生したことや、運動時は呼吸数の増加などにより飛沫が飛びやすくなるためと考える。しかしながら一方で、現代の子どもたちにおける体力低下を予防・改善することも重要な課題となっている。このような背景を踏まえて、幼児体育では、①学校感染症について、②保育における新型コロナウイルスに関わる動向、③ソーシャルディスタンスを意識した遊びの紹介、④子どもたちに人気のリズム体操の紹介、を中心に説明を行った。

現在、新型コロナウイルス感染症は、学校感染症の第一種の指定感染症となっている。まだ詳細が明らかになっていない感染症のため、保育・教育現場での対応や考え方にも変更があったり、現場での判断に任せられたりしている部分が多くある。保育者として、正しい情報を得て保育・教育ができるよう、省庁から出されている資料や関連学会の紹介を行った。また、実際に子どもたちに遊びの指導を行う場合には、3密（密閉・密集・密接）を避けて周囲との距離（ソーシャルディスタンス）を保った遊びを提示する必要がある。距離を保ちながら、子どもたちの気持ちを開放させ、体力を発散させる遊びの提案と周囲との距離を保って行いやすい表現遊びの一つであるリズム体操を紹介した。

保育者は専門職である。国の動向を知り、正しい知識を持って、根拠のある説明を保護者や子どもたち、地域の方々にすることはとても大切であると考え。そのようなことを配慮

して、資料の作成を行った。

(3) 乳児保育

今年の講座では、潜在保育士の方が職場復帰される時、おそらく1番多く配属されるのが乳児のクラスであることを想定して、最近の保育情報（2017年の保育所保育指針の改定及び今や日本中どこでも起こりうる自然災害に対する対策等）について取り上げた。

まず、保育所保育指針改定のポイントを4つ挙げた。①「乳児」と「1歳以上3歳未満児」の保育に関する記述がこれまで以上に充実したことである。この時期の保育士の対応としては、特定の大人との応答的な関わりを通じて情緒的な絆が形成されよう、温かく・優しく・丁寧な保育を心がけ、受容的で応答的な保育が望まれることを解説した。②保育における「養護」の意味を改めて確認し、「養護と教育の一体性」について、乳児であっても養護だけでなく、教育的な働きかけも必要であり、その一体的な環境づくりの重要性を説いた。③保育所が、幼稚園、幼保連携型認定こども園と同等に、「幼児教育機関」としての役割を果たしていくことになった。国が保育所を「教育機関」として位置づけたことを解説した。④職場の研修体制の強化が図られ、保育士のキャリアアップの仕組みを明確にした。

次に、地震・自然災害等の危機管理として、最悪の事態を想定して災害に備えた環境づくりや、緊急時対応マニュアルの作成・避難訓練実施の重要性を訴えた。また、日常「子どもの命を守る」ための安全確認も重要である。そのための健康観察方法について解説した。乳児期は少しの変化が大事に至る可能性があるため、常に緊張感を持って保育にあたる必要がある。

最後に、発達にそった遊びについて説明した。年齢ごとの発達の特徴を概説し、その発達に適した遊びの事例を挙げた。対面授業であれば、手作りおもちゃを展示するところであるが、紙面開催となったためできるだけ多くの写真を掲載した。

(4) 器楽

器楽では、コードと楽器の扱い方や手作り楽器を主要テーマとした。当初はピアノ実技を伴う予定であったが、紙面開催により、参加者の知識を深めながら自主練習や実演へと導く内容に転換した。

まず、コードでは、メジャーコード、マイナーコード、セブンスコードの構造を理解するために練習問題を提示した。さらに、子ども向けの歌で頻繁に用いられるハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調の主要コードとその基本形と転回形を示した。また、主要コードで演奏できる曲を取り上げた。ハ長調は『かえるの合唱』『時計のうた』、ヘ長調は『ぞうさん』『幸せなら手をたたこう』、ト長調は『ふしぎなポケット』『アルプス一万尺』、ニ長調は『こぶたぬきつねこ』『おつかいありさん』である。伴奏形は、「歩く」「走る（かけ足）」「ゆっくり歩く」「スキップ」等を提示した。参加者が1曲を多様な弾き方で練習できるようにした。

次に、子ども向けに使われる打楽器（タンブリン、カスタネット、鈴、トライアングル）について、それらの持ち方や演奏方法を示した。以前、講師が現役保育士から「持ち方や演奏方法の知識が少ないままに使用している」という情報を入手していたため、この機会に取り入れることにした。楽器の中では、学生が2020年度の表現Ⅱの授業において作成した手作り楽器の作品を掲載した。学生の作品は自由な発想による創意に富んだデコレーションが施されていたので、参加者にそれらのアイデアを参考にしてもらいたいという意図があった。最後に紙コップによるマラカス、ウッドブロッグの作り方も紹介し、自作の楽器でリズムに合わせて鳴らせるようにリズムパターン例を添えた。

(5) 保育内容総論

本講座では、『保育の「不易」と「流行」、そして保育を支える「子ども理解」について』を研修のタイトルとした。保育の基本である「不易」の部分、社会の変化や教育のニーズに伴う「流行」の部分に関する理論的背景を踏まえながら、保育の本質である「子ども理解」について実践例を交えながら資料を作成した。

また、今回は紙面研修となったので直接やりとりを交わしながらの対面研修は叶わなかったが、少しでも“共に学ぶ”という想いを込めて語り口調で文章を連ねていくことを試みた。

具体的な内容としては、保育・幼児教育の重要性と指針・要領改訂についてふれながら、その中でも幼児期から高等学校教育にかけて育む「3つの資質・能力」、小学校教育との円滑な接続のための「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と、従前より保育のねらいや内容を構成している5領域との関連について整理した。次に改めて保育・幼児教育の基本である「幼児の主体性を育む」「遊びを通しての指導」「一人一人に応じた指導」等について確認したうえで、そのために必要な子ども理解についてふれた。子ども理解については、子ども理解のための具体的方法、子ども理解のための保育者の心もちについてポイントをまとめたうえで、実際のエピソードや子どものつぶやきの一例を紹介した。最後に、昨年度研修会終了後に環境構成の具体的な方法に関して詳しく知りたいというご要望があったので、環境構成を創る際に必要なポイントを整理して追記した。

潜在という立ち位置で保育に興味をもっている方、実際に保育に携わりながら学び続けたいという方に、次代を担う子どもたちを責任感をもって育てていくという使命感と共に、子どもたちの素晴らしい成長の傍らに在ることの幸せを感じることでできる一助となればという想いで資料を作成した。

Ⅲ. 得られた成果と評価

1. 受講者アンケート調査

研修会の受講者9名に対し、無記名式のアンケート調査を実施した。その結果を図1から

図5に示す。

(1) アンケート調査の結果

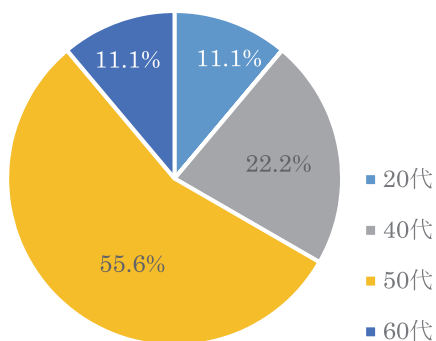


図1 受講者の年齢層

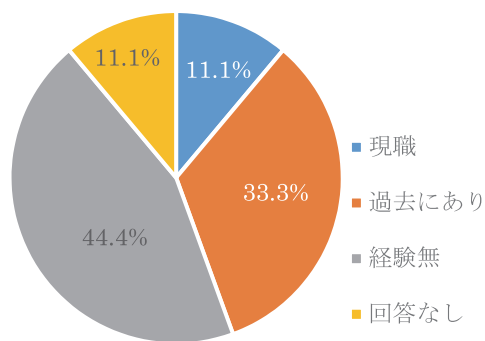


図2 受講者の就労経験

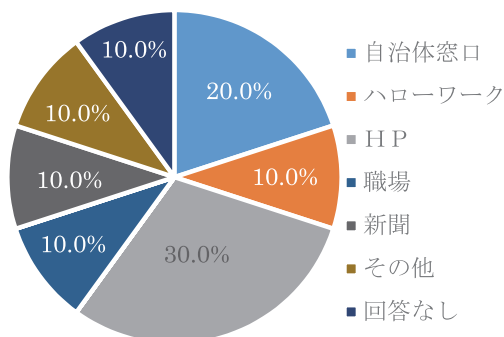


図3 受講のきっかけ

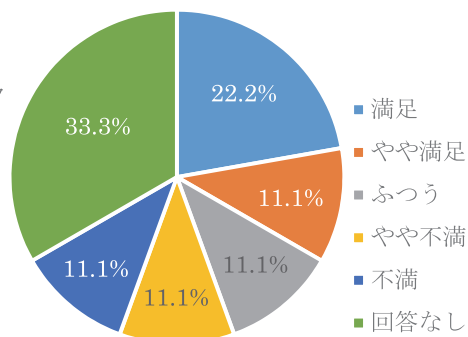


図4 受講者の満足度

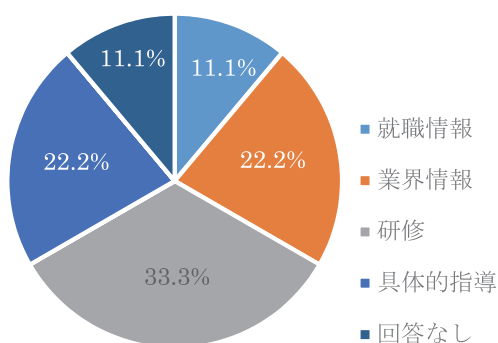


図5 今後必要なサポート

受講者による感想・意見は次のとおりである。

・実際にお話を聞ければ、なおよかったと思います。

具体的な案件について記されており、大変勉強になりました。小1の子を持つ母親ですが、

今回の資料を見て、日々の子育てに役立つ点が多数ありました。ありがとうございました。

- ・誌面の講座でしたが、興味深く見させていただきました。忙しい毎日の中で用意してもらいありがとうございます。

次回はぜひ大学での研修会に参加したいです。わかりやすい内容でした。

- ・潜在保育士セミナーに過去参加させていただきました。保育士現場に就労する中、経験の浅さに困惑する日々があります。年齢の壁も厚く、経験不足も感じます。日々の体験で「言葉がけ」「とっさの対応」などの様々な場面での保育。研修会ではいま一度、勉強の場・意見交換・実習体験等、即戦力となれる様、習得させていただきたいと願っております。
- ・紙面講座は H30改訂の保育指針などで学習させていただきましたが、実際の講義参加が良いと期待していたので残念でした。
- ・資料はとても分かりやすいものでしたが、先生方のお話を聞きながらの受講が一番だと思いました。今年度は残念でしたが、来年は研修会があればいいと思います。資料を送っていただきありがとうございました。
- ・保育・幼児教育の軸と合わせて、時代に合わせていく適応力の必要性（コロナのような特殊なことも含めて）、スピード感の重要性を感じました。直接、先生方のお話を聞いたかったと心から思いました。こういう知識をしっかりと踏まえたうえで実際の現場で起きることにどのくらい対応できるのかなあと考えます。基礎知識をもっと勉強したいし、カウンセリングもおもしろいなと思いました。

(2) アンケート調査結果の考察

受講者の年齢層は、図1のとおり50代が55.6%と過半数を超えていた。受講者の就労経験は、図2のとおり「保育者としての就労経験がない」が44.4%、「保育者の経験が過去にはあるが現在は就労していない」が33.3%、「現在保育者として勤務されている」が11.1%であった。つまり、「保育者としての就労経験がない」もしくは「過去には経験があるが現在は就労していない」方、年齢としては50代の方の参加が多かったということが言える。「現在保育者として勤務している」いわゆるリカレント教育を要望している割合は今年度は11.1%と少なかった。これは保育現場が新型コロナウイルス感染症対策に追われる時期であったことも影響していることが考えられる。

受講のきっかけは、図3のとおり本学のホームページが30.0%、自治体窓口が20.0%で過半数であった。以上のことから、引き続き大学のホームページの充実や自治体との連携が必要であると捉えられる。

受講者の満足度としては、図4及び実際を受講者の感想・意見をふまえると、研修内容に関しては一定のニーズに応えたことがうかがえるが、対面での研修を望む声が多く、そのことが満足度に影響したと考えられる。

今後必要なサポートとしては、図5のとおり「研修」が33.3%、「業界情報」が22.2%、「具

体的指導」が22.2%であった。保育に関する学び直しや即戦力となる具体的指導に関する研修及び保育現場における現状の把握に関するニーズが高いことがうかがえる。

2. 潜在保育士復職支援研修会の実施状況

潜在保育士復職支援プロジェクトは2014年度より取り組んでいる。研修会受講者数及び再就職者数については表1のとおりである。

表1 潜在保育士復職支援プロジェクトの実施状況

	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
研修申込者数	52名	24名	28名	23名	29名	19名	9名
実受講者数	31名	22名	24名 (12名)	22名 (9名)	25名 (13名)	16名 (6名)	9名 (1名)
就職者数 (含：内定者)	5名	5名	7名	8名	3名	1名	1名

() 内はリカレント研修の受講者 *2021年1月19日現在

今年度については、新型コロナウイルス感染症対策のため当初より定員を10名に限定していたこともあり、受講者数は少なかった。2014年度以降地道ではあるが、着実に保育者を輩出しているという事実を踏まえながらも、2019年度からは若干受講者数が減少していることもあり、今後の動向を注視する必要がある。

Ⅳ おわりに一残された課題とその解決への展望

2014年の潜在保育士復職支援プロジェクト立ち上げから7年が経過した。本年度については、コロナ禍の影響によって紙面研修となったために、対面での研修を望む受講生にとっては、やや満足度の低いものとなり、来年度以降の意欲的な参加や本プロジェクトの展開に不安を残した一面もある。

しかし、時代は大きな転換期にあり、これまででない視点や方法をもって発想の転換が求められており、こうした研修会等も新しい形態での開催やこれまでに考えもつかなかった研修内容へと進化するチャンスでもあるととらえることができる。

例えば、オンラインによる開催もその顕著なもののひとつである。対面での研修を望む声が大きいのもの、今後、各家庭のオンライン環境の向上とともに、あるゆるシーンでオンライン利用が一般化すれば、想像以上の長所や利点が理解され、これまでの参加エリアが大幅に拡大できることになる。

2014年の開始時こそ31名の参加があったものの、以降20名～25名で推移し、昨年度は16名、本年度の申込者は9名にとどまっている。また、本年度申込者の年齢が、50歳代5名(55.6%)、60歳代1名(11.1%)と全体の参加者の三分の二を占め、一気に高齢化の傾向にある現実を

考える時、オンライン開催を一例とした新しい研修の形態を模索することは、今後の展開に新たな光を見出していく可能性を秘めている。

リカレント教育の視点から見ても、働き盛りの若年層保育者は、我が子の子育てや現場での多忙から研修を受ける時間が確保できない現実、また、保育現場を離れて「学び直す」ことができない社会の構造上の課題を一気に解決していける可能性さえある。

本年度のように、一見ピンチに見える時こそ、「新たな時代の学び直しのスタイル」へと大きく舵を切るチャンスであると考え、その方法や内容を創造していきたいと考えている。

V 参考文献

- 1) 厚生労働省 (2020)「保育所等関連状況取りまとめ (令和2年4月1日)」
<https://www.mhlw.go.jp/content/11922000/000678692.pdf> (参照 2020-10-20)
- 2) 岡山市 (2020)「保育所等入園申込児童数の推移 (平成22年度～令和2年度)」
<https://www.city.okayama.jp/kurashi/cmsfiles/contents/0000012/12547/jidousuusui>
(R2.4) (参照 2020-10-20)
- 3) 岡山市 (2015)「岡山市保育士・保育所支援センターのお知らせについて」
<https://www.city.okayama.jp/kurashi/0000005343.html> (参照 2020-10-20)
- 4) 澤津まり子・鎌田雅史・山根薫子 (2015)「潜在保育士の実態に関する調査研究－離職の要因を探る－」就実論叢第45号 pp.191-200
- 5) 澤津まり子・田中誠・秋山真理子・松本希・鎌田雅史・笹倉千佳弘・柴川敏之・Z. 山田章子・荊木まき子・伊藤優 (2016)「潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育の活動報告」就実論叢第46号 pp.199-205
- 6) 柴川敏之・笹倉千佳弘・Z. 山田章子・荊木まき子・伊藤優・田中誠・鎌田雅史・秋山真理子・松本希・澤津まり子 (2017)「潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育－2017年度活動報告」就実論叢第47号 pp.221-228
- 7) 松本希・鎌田雅史・秋山真理子・荊木まき子・伊藤優・小谷彰吾・土田耕司・柴川敏之・ズビャーギナ章子・土倉由妃・澤津まり子 (2018)「潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育－2018年度活動報告」就実論叢第48号 pp.163-172
- 8) 小谷彰吾・柴川敏之・鎌田雅史・ズビャーギナ章子・土田耕司・松本希・秋山真理子・荊木まき子・土倉由妃・澤津まり子 (2019)「潜在保育士復職支援研修及び卒後リカレント教育－2019年度活動報告－」就実論叢第49号 pp.151-160